

## E I 論文

## 国語文法への5つの提言

—文法はローマ字で—

今泉 喜一

## 要 旨

日本語構造伝達文法の視点から、国語文法への提言をする。国語文法は文法的要素の分析に、いまだに「かな」を用いており、さまざまな弊害をきたしている。この状況に鑑み、ここに5つの提言を行う。①まず、この「かな」の使用をやめ、音素の示せる「ローマ字」を使用すること。②そのうえで、動詞や形容詞、態の形態素を的確に取り出すこと。③実体(名詞)と属性を結びつけている「格」を明確に捉えること。④時と相の関係を論理的に捉えること。⑤動詞の歴史的变化は、活用の単純化などが目的なのではなく、動詞の態拡張の結果であることを認識すること。この5点である。

キーワード: かな, ローマ字, 形態素, 格, 時相, 態拡張

## E I 0 国語文法の問題点 …… 文法をかなで扱っている

## E I 0.1 国語辞典にみる問題点

国語辞典の、たとえば「読む」「起きる」「食べる」の項を見てみると、このように書かれている。

よ・む	【読む】	〈他五段〉
お・きる	【起きる】	〈自上一〉
た・べる	【食べる】	〈他下一〉

この「よ・む」「お・きる」「た・べる」という書き方は、「よ」「お」「た」が語幹で、「む」「きる」「べる」が活用語尾であるということを表している。これは**国語文法特有の、言語学とは異なる情報**である。国語文法だからこそ、「よ」「お」「た」を語幹だと言えるのである。……この書き方が、**すべての国語辞書で**、昔から令和の現在まで何の疑いもなく続いてきて、そして、ほうっておけば、連綿と未来にも続くのである。……とんでもなく違和感を感じているのは、本論文筆者だけであろうか。

また、〈他五段〉は、他動詞で五段活用をするということを示し、〈自上一〉は、自動詞で、上一段活用をするということ、〈他下一〉は、他動詞で、下一段活用をするということを示している。

この**非言語学的な書き方を改善するために**、かな表示では「・」をはずす必要がある。「よ・む」を「よむ」とし、「お・きる」を「おきる」、「た・べる」を「たべる」とするのである。そして、**ローマ字で形態素を示す必要がある**。

よ・む	【読む】	〈他五段〉	→	よむ	yom-u	【読む】	〈他〉
お・きる	【起きる】	〈自上一〉	→	おきる	oki-ru	【起きる】	〈自〉
た・べる	【食べる】	〈他下一〉	→	たべる	tabe-ru	【食べる】	〈他〉

矢印の右側にあるように表示することで、語幹は「よ」ではなく yom- であり、「お」ではなく oki- であり、「た」ではなく tabe- なのであることが示せる。こう書けば、-u, -ru が「描写詞」であることが示せる。

また、語幹は、「子音終わりか、i, e のどちらの母音終わりか」を示せば、それで十分である。「五段活用」「上一段活用」「下一段活用」、「五段」「上一」「下一」という概念それ自体が不必要なのである。動詞語幹を上のようにローマ字で示しさえすればよいのである。

自動詞か他動詞かの情報は必要であるから、〈自〉〈他〉は書いておく。

となると、すべての国語辞書の動詞当該部分は書き換える必要があることになる。というより、それだけでなく、国語文法のかなりの部分の再検討が必要なのである。

## 0.2 「かな」使用をやめるべき、構造も示すべき

国語文法にこのような非言語学的な扱いの事態が生じているのは、文法を「かな」で扱ってきたことに原因がある。国語研究では、**文の表記**には大変都合のよい「かな」を、**文法研究**にまで使用したのである。江戸時代以降今日までこれを踏襲し、そして恐ろしいことに、ほうっておけば、未来も続いていくのである。国語学者はこれの非合理性にまったく気づいていないか、無視してきた。

本来、音素を単位とすべき文法研究が、「かな」を使用したために、拍が単位となってしまうている。(いうなれば、個人を研究の対象とすべきなのに、家を単位として研究してしまった。) ……「かな」を使用したために、動詞や形容詞の形態素が見つけられず、また、「助動詞」がたくさん作られてしまった。

国語文法は、拍を示す「かな」の使用をやめて、音素を示す「ローマ字」を使用すべきである。そして、明示的な図という形で、構造を示すべきである。

## 0.3 活用表も改善すべき

国語文法の現在の活用表はこうなっている。驚くほど非合理的である。

表E1-1 国語文法の活用表

国語文法		語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		動詞	読む	よ	ま、も	み	む	む	め
	起きる	お	き	き	きる	きる	きれ	きろ	
	食べる	た	べ	べ	べる	べる	べれ	べろ	
	形容詞	白い	しろ	かる	か、く	い	い	けれ	○

この活用表を下のように改善するのである。ここでは細かい説明はしない。『主語と時相と活用と－日本語構造伝達文法・発展C－』を参照いただければ幸いである。

表E I-2 動詞に直接に接続する形態表（新活用表）

形態の機能	詞	形態 (nom- / tabe-)	形態の名称	国語文法	
構造の形を変えない	(1) 文を終止する	描写詞	① -(r)u	基本(終止)描写詞	終止形
			② -e / -ro	命令描写詞	命令形
			③ -(y)oo	意志・推量描写詞	(未然形)
	(2) 主文を続ける	描写詞	④ -(i)	中止描写詞	連用形
			⑤ -(r)eba	条件描写詞	(仮定形)
	(3) 他属性や実体と関連づける	描写詞	⑥ -(i)	他属性連続描写詞	連用形
			⑦ -(r)u	実体修飾第1描写詞	連体形
			⑧ -(i)	実体修飾第2描写詞	連用形
構造に付加する	(4) 否定する	否定詞	⑨ -(a)na.k-	否定詞	(未然形)
	(5) 態を構成する	態詞	⑩ -(s)as-	原因態詞	(未然形)
			⑪ -(r)ar-	受影態詞	(未然形)
			⑫ -e-	許容態詞	なし

⑩⑪は動詞の主体(主語)が変化する。⑫でも変化する場合がある。

表E I-3 形容詞に直接に接続する形態表（新活用表）

形態の機能	詞	形態 (yo.k-)	形態の名称	国語文法	
構造の形を変えない	(1) 文を終止する	描写詞	① -i	基本(終止)描写詞	終止形
			④ -u	中止描写詞	連用形
	(2) 主文を続ける	描写詞	⑤ -ereba	条件描写詞	(仮定形)
			⑥ -u	他属性連続描写詞	連用形
	(3) 他属性や実体と関連づける	描写詞	⑦ -i	実体修飾第1描写詞	連体形
			⑧ -u	実体修飾第2描写詞	(連用形)

形容詞の①～⑧の数字は上の動詞の表の中の数字と対応している。

#### E I 0.4 5提言

国語文法には多くの問題点があるが、本論文では次の5点を提言する。

- [1] 文法を「かな」で表示するのをやめること
- [2] 動詞や形容詞, 態詞を形態素で把握すること
- [3] 「格」を「実体と属性の論理関係」と定義すること
- [4] 時と相の関係を図で捉えること
- [5] 動詞活用の単純化に動詞の態拡張を見ること

この5項目につき、次ページから説明する。

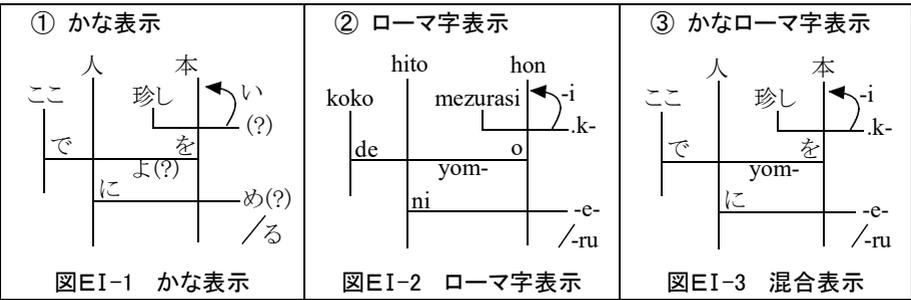
**E1 [第1提言] 文法を「かな」で表示するのをやめること**

**E1.1 表記……文はかなで、文法はローマ字で**

国語文法では、文を表記するのに適した「かな」を、動詞や態、形容詞の文法的分析の表示にも用いているため、単純なものが複雑なものになってしまっている。

- ① 日本語は音声表記が拍を単位とするので、文の表記には「かな」が適している。参考までに、( ) 内に音節数も示しておく。
- ここで 3拍 (3音節)  
珍しい 5拍 (4音節)  
本が 3拍 (2音節)  
読める 3拍 (3音節)
- ここ で め ず ら しい 本 が 読 め る 。  
拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍 拍
- ② 文法は音素を単位とするので、文法の表示には「ローマ字」が適している。
- koko-de mezurasi.**k**-i hon-ga yom-e-ru **k**は発音しない  
音音音音 音音 音音音音音音音音 音音 音音音 音音 音音音 音音音 音音音  
素素素素 素素 素素素素素素素素素 素素 素素素 素素素 素素素 素素素
- ③ とはいえ、見やすさのためには、実体(名詞)類や格は「かな」で表示するとよい。
- ここ-で 珍し**k**-i 本-が yom-e-ru

上の3種類の文は同じで、下図のように同じ構造である。+の部分は主格を示す。



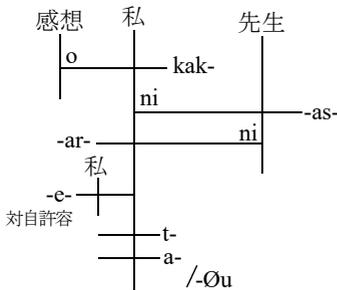
- ①の図参照 「かな」では構造図上で属性を示すのに無理がある。  
 形容詞…… mezurasi.**k**-i を「めずらしい」と書くと、.k-の存在を示せない。  
 動詞・態… yom-e-ru を「よめる」と書くと、yom- と -e- が分離できない。  
 yom-e-ru とすれば、なぜ「本」が主格なのかが正しく説明できる。
- ②の図参照 全部ローマ字で、読みにくくなければ②でもよい。
- ③の図参照 ③の「混合表示(かなまじりローマ字表示)」が見やすいのではないか。
- ・①から、「かな」で表示すると動詞などの属性が正しく表示できないことがわかる。
  - ・構造を示すことによって、なぜある実体が主語(主格実体)になるのかを示せる。

**E I 1.2 単純なものなのに……「かな」文法だから説明できない／複雑に表現**

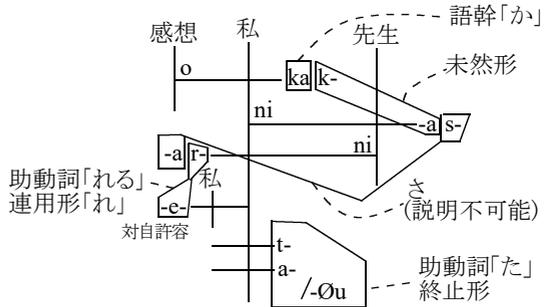
国語文法では、「かな」表示のため、属性が正しく分析できず、現象が説明できない。あるいは、単純なものが複雑に表現される。これを3つの具体例で示したい。

- (1) 先生に感想を書かされた kak-as-ar-e-Øi=t-Øi=a-Øu
- (2) 彼は英語が読める yom-e-ru
- (3) 21日は晴れるだろう hare-ru Ø-d=ar-oo  
21日は晴れることだろう hare-ru こと-d=ar-oo

(1) 「かかされた」……正しくは kak-as-ar-e-Øi=t-Øi=a-Øu である。……単純（下左図）  
 〈動詞-態詞-態詞-態詞-描写詞=基〉



図E I-4 形態素表示 書かされた  
 (描写詞は一部省略)



図E I-5 国語文法での説明  
 (構造は左図と同じ)

国語文法では、かな表示した右の図を次のように複雑に説明している。

- 動詞「かく」の未然形「かか」 (動詞語幹は「か」)
- + 「さ」(国語文法では説明不可能)
- + 受身の助動詞「れる」の連用形「れ」
- + 過去の助動詞「た」の終止形「た」

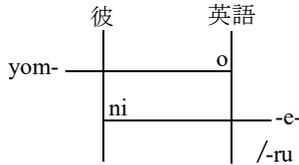
かか	さ	れ	た
「かく」の未然形	(説明できない)	助動詞「れる」の連用形	助動詞「た」の終止形

この複雑さは、単純なもの(上左図)を「かな」を単位に説明しようとするために生じている(上右図)。

国語文法では ka / ka / sa / re / ta と分析しているのである。  
 か か さ れ た

この分析・説明は、「かな」に従っているだけで、合理性がまったくない。

(2) 「よめる」……正しくは yom-e-ru (動詞-態詞-描写詞)であり、単純である。(下左図)  
 -e- が可能を表す。  
 「英語」が主格にあるのは -e- の主格にあるためである(彼に英語が読める)。  
 また、「彼」は yom-の主格にあるので、主格になりうる(彼が英語を読める)。  
 二重主語も可能である(彼が 英語が読める)。



国語文法では  
構造図の書き  
ようがない。

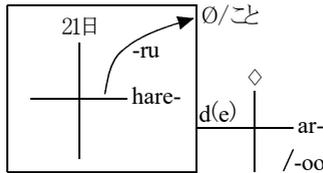
図EI-6 形態素表示 yom-e-ru

図EI-7 国語文法

国語文法では「かな」で表示するので、正しい分析ができない。それで、「よめる」という語全体を「よむ」の可能動詞としている。五段活用を下一段活用にしたものが可能動詞である、と、活用の違いの問題としているが、それでなぜ可能が示せるのかは分からない。説明しようという意欲はない。

国語文法では、可能動詞がなぜ可能を表すかの説明はできない。

(3) 「だろう」……正しくは -d=ar-oo である。(格詞=動詞-描写詞)……単純 (下左図)



国語文法では  
構造図の書き  
ようがない。

晴れる(0/こと)だろう  
図EI-8 形態素表示

図EI-9 国語文法

国語文法では、断定の助動詞「だ」の未然形「だろ」に、推量の助動詞「う」の終止形を加えたものと説明している。(複雑、誤認識)

だ ろ      う      (つまり、da / ro / o と分析)  
 助動詞「だ」の未然形   助動詞「う」の終止形      だ ろ う

この分析は、「かな」に従っているだけで、合理性がない。

国語文法は、動詞や形容詞、態詞という属性の分析において、「拍」(かな表示)を単位とすることをやめ、「音素」(ローマ字表示)を単位とするべきである。いったい、分析に「かな」(拍)を用いる理由は、合理的に説明できるのだろうか。 昔からそうであったから、という説明なのだろうか。

## 国語文法への5つの質問

国語文法に対して質問がある。この論文で扱ったことが中心になる。以下の5項目につき、回答が得られれば幸いである。

**[1] 文法の分析に「かな」を使う根拠は何か。**

- ・なぜ、拍が単位となる「かな」で分析するのか。その根拠は何か。
- ・「未然形」を設置する理由を説明してほしい。
- ・「かかされた」の「さ」はどう説明すればよいのか。
- ・可能動詞（「よめる」等）が可能を表すことは、どう説明するのか。

**[2] 国語文法のいう「形態素」は名詞関係だけのようである。動詞や形容詞、態には形態素はないのか。**

- ・国語文法が動詞などで「形態素」を重視しない理由を説明してほしい。
- ・「よむ」は「よ・む」が正しくて、yom-u は誤りか。
- ・形容詞の .k- という形態素についてどう評価するか。
- ・態の形態素、特に「許容態」 -e-, -ur- について、どう評価するか。

**[3] 国語文法では「格」をどう捉えているのか。その根拠は何か。**

- ・国語文法の「格」の定義は意味があるか。西洋文法を参考にしたものか。
- ・国語文法で、「名詞」と「動詞」の論理関係を表す概念、用語は何か。

**[4] 時(テンス)と相(アスペクト)の関わりについてどう考えるか。**

- ・国語文法では、時(テンス)と相(アスペクト)をどう定義しているか。
- ・国語文法で、時(テンス)の図示は可能か。
- ・国語文法で、相(アスペクト)の図示は可能か。
- ・国語文法で、時(テンス)と相(アスペクト)の関わりの図示は可能か。
- ・相対時表現は、日本語でも特に現代語に特有のものか。

**[5] 動詞は歴史的に活用が単純化した。この事実はなぜ起こったと考えるか。**

- ・国語文法では、「動詞の活用の単純化」を「目的」として説明するのか。
- ・態拡張により必要な動詞が作られたという考察をどう評価するか。
- ・「動詞の活用の単純化」は「目的」ではなく、態拡張の「結果」ではないか。
- ・「係り結び」の現象は「動詞の態拡張」抜きに考えられないのではないか。

## E I [第2提言] 動詞や形容詞、態詞なども形態素で把握すること

## E I 2.1 形態素を詞とする

どの国語研究事典、日本語研究事典を見ても、「形態素」が記述されているのは名詞類についてである。(動詞の形態素もあるにはあるが、名詞形としてのものだけ。)

日本語構造伝達文法のいう形態素とは次のようなものである。

**形態素……意味と文法的機能をもつ最小言語単位**

この形態素を、本文法では「詞」とよぶ。

たとえば, yom-	は「読む」という意味をもつ「動詞」であり,	yom-	動詞
-u	は「終止」や「実体修飾」の意味を表す「描写詞」である。両者	-u	描写詞
で形成する yom-u	は「動詞語」である(『文法』5.1, 5.3 参照)。	yom-u	動詞語

ここでは5種類の形態素(動詞、形容詞、態詞、描写詞、国語文法の「助動詞」)を取り上げ、以下に、形態素(1)~形態素(5)として見出しとすることにする。

## E I 2.2 形態素(1) 動詞

国語文法では、「動詞語幹」を次のように定義している。( ) は今泉補記。

(かなで表示した) 動詞の変化しない部分

この定義のために、言語学的には珍妙な語幹になっていて、語幹では動詞が特定できない。この異様な事態が、令和の今日までずっと続いていて、(ほうっておけば) 今後も続くであろうことは、まさに驚くべきことである。

語幹で動詞が特定できない例として、コラムV5で示した、「た」を「語幹」とする動詞の一覧表を再掲する。ローマ字表記なら、語幹で動詞が特定できる。

表E I-4 国語文法で「た」を語幹とする動詞……語幹で動詞が特定できない

	動詞	かな表記	かな語幹	ローマ字表記	ローマ字語幹	
五段活用動詞	炊く	たく	た	tak-u	tak-	子音末動詞
	足す	たす	た	tas-u	tas-	
	立つ	たつ	た	tat-u	tat-	
一段活用動詞	絶える	たえる	た	tac-ru	tae-	母音末動詞
	建てる	たてる	た	tate-ru	tate-	
	貯める	ためる	た	tame-ru	tame-	
	足りる	たりる	た	tari-ru	tari-	
	食べる	たべる	た	tabe-ru	tabe-	

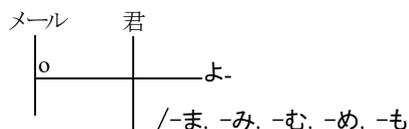
ローマ字表記なら、語幹で動詞が特定できる。

前ページの表のとおり，国語文法はかな表示のため，語幹で動詞が特定できない。

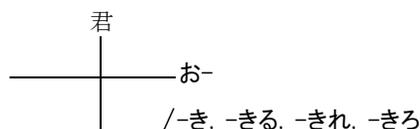
下に国語文法の「かな」で表示する動詞の活用の例を示す。そのあとで，それを本文法の「ローマ字」で表示する形態素で示す。両者を対照することで違いが分かるだろう。「読む」「起きる」を例とする。

表E1-5 国語文法の活用

読む	起きる	
動詞語幹…よ	動詞語幹…お	古語(参考)
よま 動詞(未然形)	おき 動詞(未然形)	おき
よみ 動詞(連用形)	おき 動詞(連用形)	おき
よむ 動詞(終止形, 連体形)	おきる 動詞(終止形, 連体形)	おく, おくる
よめ 動詞(仮定形, 命令形)	おきれ 動詞(仮定形)	おくれ
よも 動詞(未然形)	おきろ 動詞(命令形)	おきよ



図E1-10 国語文法ではこうなるだろう

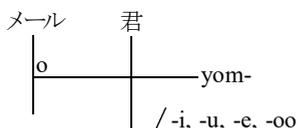


図E1-11 国語文法ではこうなるだろう

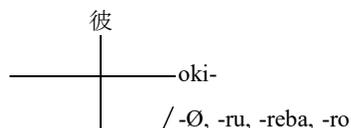
上記のものを日本語構造伝達文法の「形態素」で扱うとこうなる。異なる。

表E1-6 活用の形態素表示

読む yom-u	起きる oki-ru	
動詞語幹(動詞)… yom-	動詞語幹… oki-	古語語幹(3形)
<del>yom-a</del> (-a という形態素はない)	oki- 動詞語幹	ok:i-
yom-i 動詞語(連用機能ほか)	oki-Ø 動詞語(連用機能ほか)	ok:i-Ø
yom-u 動詞語(終止・連体機能)	oki-ru 動詞語(終止・連体機能)	ok-u, ok:ur-
yom-e 動詞語(命令機能)	<del>oki-re</del> (-re という形態素はない)	ok:ur-e
<del>yom-o</del> (-o という形態素はない)	oki-ro 動詞語(命令機能)	ok:i-yo



図E1-12 形態素表示



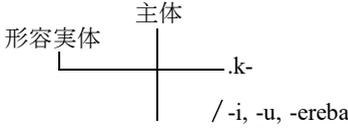
図E1-13 形態素表示

ここでは簡単にしか触れていないが，上に見るだけでも国語文法の動詞の捉え方がいかに「かな」にとらわれたものであるかが分かる。

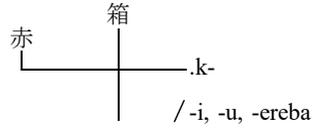
**E-1 2.3 形態素(2) 形容詞**

形容詞は **形容実詞** k- のような形をしている。

たとえば, aka.k- hiro.k- omosiro.k- などである。



図E-14 形容詞の構造



図E-15 例: 箱が aka.k-i

国語文法での形容詞の扱いと、構造伝達文法での扱いの対比を表にしてみる。

表E-7 形容詞の扱いの違い (現代語)

	形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
国語文法	よい	よ	かろ	かつ, く	い	い	けれ	○
構造伝達文法	yo.k-i	yo.k-	-	-u	-i	-i	-ereba	-

終止形, 連体形の yo.k-i の k は音便化して発音されなくなった。これを **k̄** で示す。yo.k̄-i (よい)

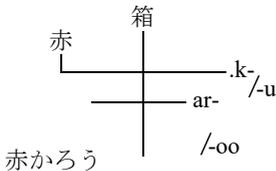
国語文法の扱う現代語の形容詞活用を、形態素で示せばこうなる。

表E-8 国語文法の形容詞活用を形態素で示す (下線部が国語文法での語尾)

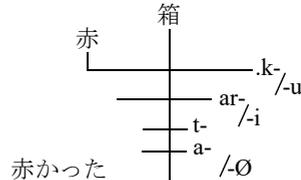
よ <u>かろ</u>	yo.k- <u>u</u> =ar-oo	「かろ」の中には「動詞 ar-」が入っている。-u 発音せず。
よ <u>かつ</u>	yo.k- <u>u</u> =ar-i=t- <u>o</u> =a- <u>o</u>	「かつ」は「動詞 ar-」のタ形の一部である。-u 発音せず。
よ <u>く</u>	yo.k- <u>u</u>	これは連用形だから上の2つの中に入っている。
よ <u>い</u>	yo.k̄- <u>i</u>	.k-i の k は発音されない( <b>k̄</b> )。これは「書きて」が音便形「書いて ka <b>k̄</b> -i=te- <u>o</u> 」となるのと同じ。
よ <u>い</u>	yo.k̄- <u>i</u>	
よ <u>けれ</u>	yo.k- <u>ereba</u>	国語文法で.k-ere だけを仮定形といっているのは問題。

(1) 終止形は古語では「(よ)し (yo.)s-i」と言っていたが、鎌倉時代に「(よ)き (yo.)k-i」に統一されて、これがすぐに「(よ)い (yo.)k̄-i」という音便形になった。鎌倉時代以降、「(よ)し」の形も使用されたが、江戸時代以降は「(よ)い」だけである。(古くからの言い方の残っているものや、古語表現にする場合は、現代語でも「(よ)し」を使う。)

(2) 推量や過去を表すときには、下図のように、動詞の ar- を付け加える。



図E-16 推量 aka.k-u=ar-oo

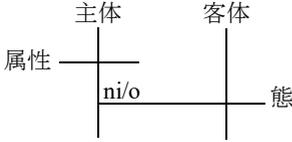


図E-17 過去 aka.k-u=ar-i=t-o=a-o

国語文法のように、形容詞を「かな」で扱うと構造が分からない。分析したうえでの説明ができない。この項の冒頭に示したように形容詞も形態素と構造で捉えるのがよい。

**E I 2.4 形態素(3) 態詞**

態……ある主体と属性が結びつくことに対して、ある客体が関わりを持つこと。



図E I-18 態

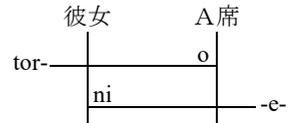


図E I-19 態の例 父親が息子を odorok-as-

態詞には下の4つがある。④は、現代語では動詞の中に残っているだけである。国語文法には①と④の認識はなかった。1つずつ検討してみる。

**態詞① -e- 許容態詞**

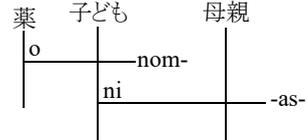
客体(A席)が、主体(彼女)と属性(tor-)の結びつきを「許容」している。主体と客体異なる場合は「対他許容」、同じ場合は「対自許容」となる。国語文法には -e- の認識がない。



図E I-20 A席が取れる

**態詞② -(s)as- 原因態詞**

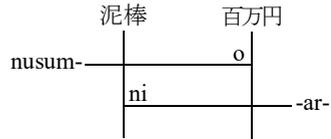
客体(母親)が、主体(子ども)と属性(薬を nom-)の結びつきの「原因」者となっている。自動詞なら「薬を」のような o がないので、ni 格のところがお格になることもある。



図E I-21 子どもに薬を飲ます

**態詞③ -(r)ar- 受影態詞**

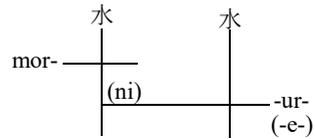
客体(百万円)が、主体(泥棒)と属性(nusum-)の結びつきの「影響を受ける」。



図E I-22 百万円が盗まる

**態詞④ -ur- 許容態詞 (古語の許容態)**

客体(水)が、主体(水)と属性(mor-)の結びつきを「許容」する。実体(水)が主体(水)と同じなので「対自許容」。現代語では-e-。国語文法は -ur- の存在を知らなかった。



図E I-23 水が漏る (→漏れる)

実際には①～③が組み合わせられる「基」として使用されることが多い。

[原因基] (nom)-as-e-

[受影基] (nusum)-ar-e-

[原因受影基] (nom)-as-e-rar-e-

[二重原因基] [二重原因受影基]などもある。

国語文法では「せる・させる」「れる・られる」という助動詞として扱うので、このような音素単位の形態素分析はできず、複雑な扱いとなっている。

国語文法は態の形態素を認識すべきであり、構造も捉えるべきである。

## E-I 2.5 形態素(4) 描写詞

動詞(nom-, tabe-)・形容詞(yo.k-)は、それだけでは使用されず、必ず描写詞 (-u, -i など) を伴って、語として使用される。

表E-I-9 描写詞がついて語に

動詞語の例		形容詞語の例
nom- <u>u</u>	tabe- <u>ru</u>	yo.k- <u>i</u>
nom- <u>i</u>	tabe- <u>Ø</u>	yo.k- <u>u</u>
nom- <u>oo</u>	tabe- <u>yoo</u>	yo.k- <u>ereba</u>

描写詞とは、動詞、形容詞を活用するために、動詞、形容詞に直接に付加する要素(付加形態素)のことで、下表①～⑧の数字のついたものである。構造の形は変えない。

表E-I-10 動詞の描写詞の表(動詞に直接に付加する形態素の表)

付加形態素の機能	詞	付加形態素 (語幹 nom- / tabe-)	付加形態素の名称	国語文法
構造の形を変えない	(1) 文を終止する	描写詞	① <b>-(r)u</b>	基本(終止)描写詞 終止形
			② <b>-e / -ro</b>	命令描写詞 命令形
			③ <b>-(y)oo</b>	意志・推量描写詞 (未然形)
	(2) 主文を続ける	描写詞	④ <b>-(i)</b>	中止描写詞 連用形
			⑤ <b>-(r)eba</b>	条件描写詞 (仮定形)
	(3) 他属性や実体と関連づける	描写詞	⑥ <b>-(i)</b>	他属性連続描写詞 連用形
⑦ <b>-(r)u</b>			実体修飾第1描写詞 連体形	
⑧ <b>-(i)</b>			実体修飾第2描写詞 連用形	

表E-I-11 形容詞の描写詞の表(形容詞に直接に付加する形態素の表)

付加形態素の機能	詞	付加形態素 (語幹 yo.k-)	付加形態素の名称	国語文法
構造の形を変えない	(1) 文を終止する	描写詞	① <b>-i</b>	基本(終止)描写詞 終止形
			④ <b>-u</b>	中止描写詞 連用形
	(2) 主文を続ける	描写詞	⑤ <b>-ereba</b>	条件描写詞 (仮定形)
			⑥ <b>-u</b>	他属性連続描写詞 連用形
	(3) 他属性や実体と関連づける	描写詞	⑦ <b>-i</b>	実体修飾第1描写詞 連体形
			⑧ <b>-u</b>	実体修飾第2描写詞 連用形

意志・推量、命令を表現するときには、yo.k-Øu=ar-oo, yo.k-Øu=ar-e のように、動詞 ar-を加えて形容詞を疑似動詞にして使用する。否定は yo.k-u na*i* のように ⑥ の形を用いる。

上の2つの表の、「国語文法」の欄に( )内に示されているものがある。これは、  
 ・国語文法での「未然形」は -(y)oo ではなく、「のも nomo」「たべ tabe」であることを示し、  
 ・国語文法での「仮定形」は -ereba ではなく、「のめ nome」「たべれ tabere」「よけれ yokere」であることを示している。……つまり、国語文法では、描写詞の一部かゼロを取り込んだものであることを表している。

国語文法では「かな」で表示するので、語幹と描写詞が分離できない。

### 表E-12 形態素(5) 国語文法の「助動詞」を形態素表示

国語文法の現代語の「助動詞」というものを形態素で捉えると下表のようになる。

説明時に、たとえば「ない」は、形態素表示では  $-(a)na.k-i$  だけですむが、国語文法では、「動詞未然形に接続し、形容詞活用をする」といわねばならない。冗長である。

表E-12 国語文法の「助動詞」を形態素で表示する

	国語文法		日本語構造伝達文法			
	助動詞		基, 詞 (形態素表示)	例1	例2	
①	使役 せる, させる	原因基	$-(s)as-e-ru$	kak-as-e-ru	tabe-sas-e-ru	
②	受身 れる, される	受影基	$-(r)ar-e-ru$	kak-ar-e-ru	tabe-rar-e-ru	
③	打消 ぬ	ない	否定詞	$-(a)na.k-i$	kak-ana.k-i	tabe-na.k-i
			否定詞	$-(a)nu$	kak-anu	tabe-nu
④	意志 う, よう	意志詞	$-(y)oo$	kak-oo	tabe-yoo	
⑤	希望 たい たがる	希望詞	$(i)=ta.k-i$	kak-i=ta.k-i	tabe- $\emptyset$ =ta.k-i	
		希望詞	$(i)=ta.gar-u$	kak-i=ta.gar-u	tabe- $\emptyset$ =ta.gar-	
⑥	丁寧 ます	丁寧詞	$(i)=mas-u$	kak-i=mas-u	tabe- $\emptyset$ =mas-u	
⑦	過去 た	完了基	$(i)=t-\emptyset=a-\emptyset$	kak-i=t- $\emptyset$ =a- $\emptyset$	tabe- $\emptyset$ =t- $\emptyset$ =a- $\emptyset$	
⑧	様態 そうだ	様態基	$(i)=soo-d=a-\emptyset u$	kak-i=soo-d=a- $\emptyset$	tabe- $\emptyset$ =soo-d=a- $\emptyset$	
⑨	伝聞 そうだ	伝聞基	$-(r)u=soo-d=a-\emptyset u$	kak-u=soo-d=a- $\emptyset$	tabe-ru=soo-d=a- $\emptyset$	
⑩	打消推量 まい	否定推量詞	$-(r)u=mai$	kak-u=mai	tabe-ru=mai	
⑪	推量 らしい	推量詞	$-(r)u=rasi.k-i$	kak-u=rasi.k-i	tabe-ru=rasi.k-i	
⑫	比況 ようだ みただ	比況基	$-(r)u=yoo-d=a-\emptyset$	kak-u=yoo-d=a- $\emptyset$	tabe-ru=yoo-d=a- $\emptyset$	
		比況基	$mi-\emptyset=t-\emptyset=a-\emptyset=i-d=a-\emptyset$	kak-u=mi- $\emptyset$ =t- $\emptyset$ =a- $\emptyset$ =i-d=a- $\emptyset$	tabe-ru=mi- $\emptyset$ =t- $\emptyset$ =a- $\emptyset$ =i-d=a- $\emptyset$	
⑬	断定 だ です	断定基	$-d=a-\emptyset$	isu-d=a- $\emptyset$		
		断定基	$de=ar-i=mas-u$	isu-de=ar-i=mas-u	□ 部分は発音しない	

⑫「みただ」は元は「みたようだ」。つまり、「い」の元の形は「よう」。i ← yoo

①～⑬のそれぞれは、下記の参照箇所にも構造図がある。(ただし、④は描写詞なので構造を作らない。それで、構造図はない。)

表E-13 ①～⑬の構造図の参照箇所

	構造図のある参照箇所		構造図のある参照箇所
①	S3.3 原因態／原因基	⑧	C5.11(3), W6.7 参考, U3(5c)
②	S3.4 受影態／受影基	⑨	W6.7
③	S1.11 否定, 文法 第30章	⑩	(「まい」については検討中)
④	S1.13 活用表, 文法 p.42, p.242	⑪	コラムU2, C12.3 4)
⑤	U2.(5c)	⑫	A19.1 2), C12.3 4)
⑥	S1.7, 文法 10.2, 第31章	⑬	-5S1.7 「断定基」の構造
⑦	T1.5 タ		

## E1 [第3提言] 「格」を「実体と属性の論理関係」と定義すること

## E1 3.1 「格」の国語文法での定義

「格」の定義は、国語文法では、このようになっている。

名詞・代名詞などが文中の他の語(自立語)に対してもつ意味的な関係  
主格, 所有格, 目的格などがある。

格を表す格助詞は「が, の, に, を, へ, で, と, より, から, まで」である。

## E1 3.2 「格」の本文法での定義

これに対して、構造伝達文法は「格」をこのように定義している。

**格……実体が属性に対してもつ論理関係**

つまり、国語文法での定義では「他の語」となっているところを、「属性」にしてある。これは、「他の語」という表現では「名詞」も含まれてしまうが、「属性」という表現では「名詞」は含まれないからである。

名詞そのままでは属性にならない。たとえば、「勉強」は名詞であるが、「勉強(を)する」となれば、全体で動詞のようになり、「属性」となる。(正確には「する」が属性。)

国語文法でいう「連体格」は格ではない。たとえば、「私の靴」という表現において、一般には「の」が所有格を表すといわれる。「格」は「名詞と属性との論理関係」なのだから、「靴」は属性でなく名詞なので、「の」は格を示していないことになる。つまり、「所有格という格はないのである。(古代ラテン語等には「所有格」があるが、これは「格」の定義が名詞の変化を意味していたからである。「格」の定義が異なるのである。)

## E1 3.3 格詞

格を示す「格詞」は次のとおりである。

0<sub>1</sub>(主格詞), が, を, に, へ, で, と, より, から, まで, 0<sub>2</sub>  
(0<sub>1</sub>, ga, o, ni, e, de, to, yori, kara, made, 0<sub>2</sub>)

これを国語文法の「格助詞」と比べると、次のように異なっている。

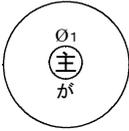
- ・「の」は格を示さないので、格詞ではない。(国語文法では、「の」は「格助詞」。)
- ・本来的な主格は音による形がないので、ゼロで示す。「0<sub>1</sub>(主格詞)」
- ・属性との論理関係が自明で、格詞を用いない客格は「0<sub>2</sub>」で示す。

例: 明日0<sub>2</sub>行く。(「明日」は、「行く」の「生起の時」を表すことが自明。)

これは格詞の「省略」とは異なる。たとえば、格詞「に」の省略なら「0<sub>ni</sub>」のように ni の省略であることを示す。(どこに行くの。→ どこ 0<sub>ni</sub>行くの。)

**E I 3.4 構造上での「格」の示し方**

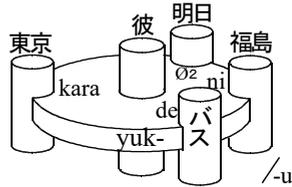
主格は属性の板の中央の位置に置き(下左図)、客格は周辺に置く(下中央図)。したがって「明日<sub>02</sub> 彼が東京から福島にバスで行く。」という文の構造は下右図のようになる。



図E I-24 主格



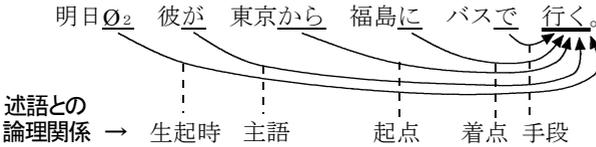
図E I-25 客格



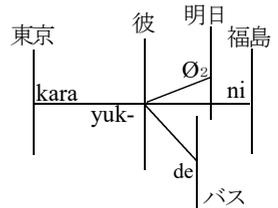
明日<sub>02</sub> 彼が東京から福島にバスで行く  
図E I-26 構造例

**E I 3.5 文中での「格」**

文中では、名詞は述語に対して格(論理関係)を持っている。上の構造を文の形で示してみる。簡略構造図を右に示す。



図E I-27 名詞は述語と格関係を持つ



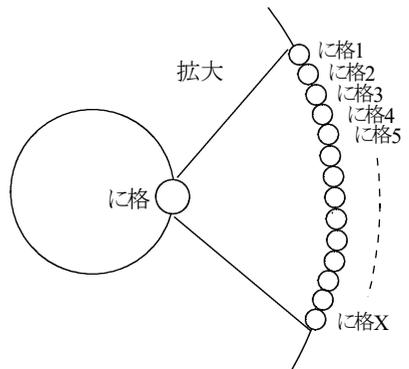
図E I-28 簡略図

上の例は非常に基本的なものであるが、言いたいことは、文中の名詞はすべて述語と論理関係を持っており、その論理関係は「格詞」が示す、ということである。格詞はゼロ(0)のこともあるが、そのときでも、「格」(述語との論理関係)はある。

**E I 3.6 同名格**

格(名詞と属性の論理関係)は分類の仕方にもよるが、おそらく1,000以上はあるだろう。これを10前後の格詞で分担して示すとすると、1つの格詞で異なる格を受け持たねばなくなる。すると、たとえば、格詞「に」が、多数の格を受け持つことになる。

同じ格詞で表現される異なる格を「同名格」という。「に格」を例にとり、図で示せば右図のようになる。



図E I-29 「に格」の同名格

**E1 [第4提言] 時と相の関係を図で捉えること**

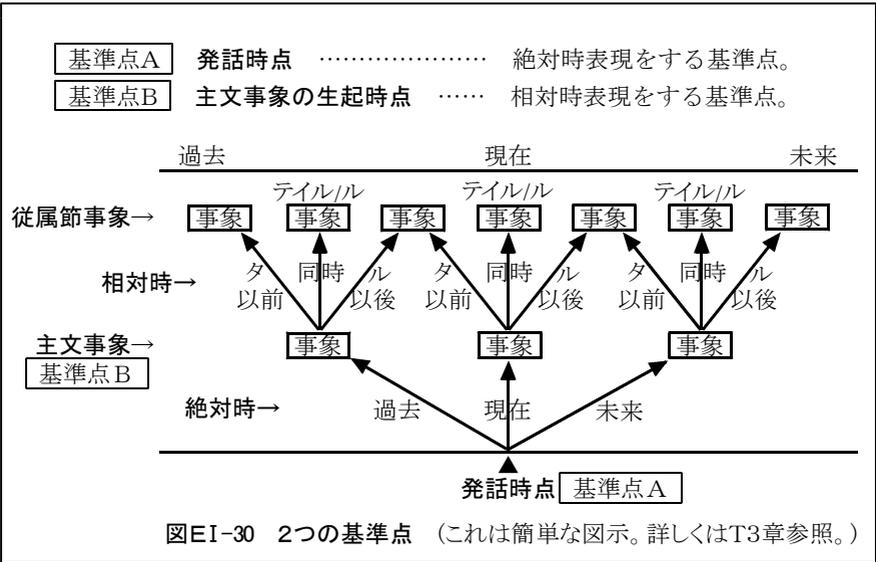
日本語の述語部分は、時(テンス)と相(アスペクト)が組み合わせられて表現されている。国語文法ではこの認識が弱い。(時と相のどちらか一方で捉える場合、また、どちらも捉えない場合については次ページの4.4参照。)

時と相の図示によって、時相が容易に理解できるようになる。

**E1 4.1 時の定義**

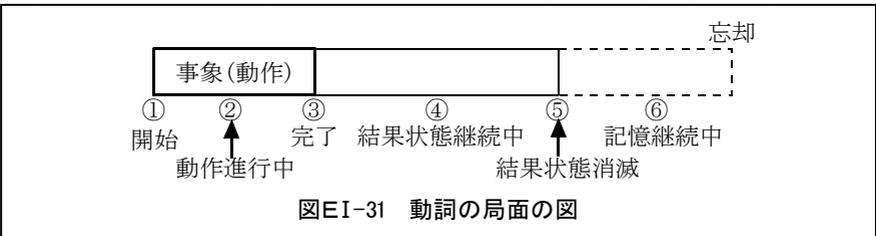
時は、その事象の生起時点が、基準点より前であるか、後であるかを示す。

基準点は日本語には2種類ある。



**E1 4.2 相の定義**

相は、事象全体の中での、言及する局面の位置を示す。下図の①～⑥である。



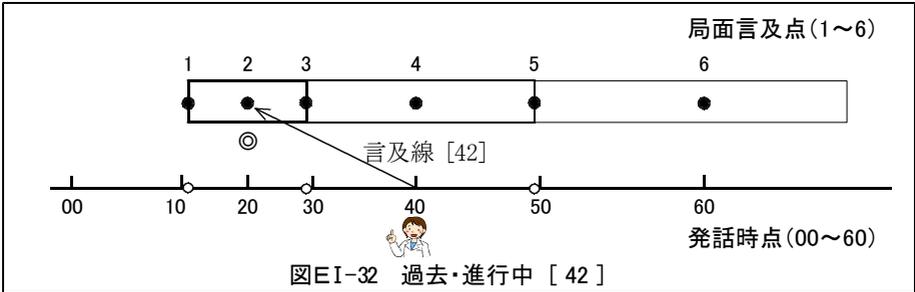
国語文法では、時相の概念があいまいである。

**E I 4.3 時・相の順で表示**

「時相」を示すときは、「時(テンス)」を先に示し「相(アスペクト)」をあとで示す。たとえば、次の「歌っていた」は「過去・進行中」と表す。表現とは順序が逆である。

彼女はさっき歌っていた。 [42]

これは、下の図において、発話時点が40、言及局面が2であり、 $40 + 2 = 42$ で、[42]のように2桁数で簡単に表せる。表現では、相、時の順である。



同じ「歌っている」でも、次の場合は[02]の「未来・進行中」になる。

彼女は明日2時ごろ歌っている。 [02]

次の場合はそれぞれ表示のようになる。

彼女はあの日フランス語で歌っている。……「現在・記憶」 [44] [66]

彼女はあの日フランス語で歌っていた。……「過去・進行中」 [42] [62]

国語文法にはこのような捉え方がない。時と相が適切に把握できていないのである。

**E I 4.4 時相表現の有無**

時相の実際の表れ方は4種類ある。①時相表現のない場合、②相のみ表現する場合、③時のみ表現する場合、④時相を表現する場合、の4種類である。

表E I-14 現代語の時相表現4種類

	時相表現	相 (アスペクト)	時 (テンス)	表現例			
				過去	現在	未来	
①	無時相表現	質的	×	×	ル 存在動詞AB 動き動詞		
②	相のみ表現	現象的側面	○	×	テイル 存在動詞B 動き動詞		
③	時のみ表現	現象的側面	×	○	タ 存在動詞AB 動き動詞	ル 存在動詞AB 動き動詞	ル 存在動詞AB 動き動詞
④	有時相表現	現象的側面	○	○	テイタ 存在動詞B 動き動詞	テイル 存在動詞B 動き動詞	テイル 存在動詞B 動き動詞

存在動詞Aは「ある、いる」。存在動詞Bは「思う、困る、感謝する、見える」等

**E I** [第5提言] 「動詞活用の歴史的単純化」に「動詞の態拡張」を見ること

**E I** 5.1 動詞の態拡張

日本語は、原動詞に態詞を付加して、動詞を増やしてきた。

このことを動詞の態拡張という。

たとえば、「分く wak-」という原動詞は態詞を取り込んで新しい動詞を作った。

わく(分く) wak-	→	wak;e-	分ける
		wak;ar-	分かる
		wak;ar;e-	別れる

この例のように、原動詞に -e-, -ar-, -as- などの態詞が付加され、その態詞が語幹化して新しい動詞が誕生した。動詞化した態詞は、「 ; 」で示すことにしている。

wak-e- → wak;e-

実に多くの原動詞がこの態拡張をしたが、それは 12 の方式に分類できる。(『日本語態構造の研究 —日本語構造伝達文法・B—』や『日本語のしくみ(4)』参照。)

いま例として、12 方式中の第2方式にある「開く ak-」という動詞を取り上げてみる。この動詞は次の図のように、態拡張して現代語の「開ける ak;e-」を生んだ。

表E I-15 原動詞 ak- が態拡張して ak;e- へ (V3.2 Z2 の表)

原自動詞		ak- (開く)				
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	ak-i	ak-u	ak-u	ak-ë	ak-i=a
	前文献時2	ak-ay-i				ak-ay-i=a
	前文献時3	ak;ë-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö
	前文献時4					
以下、文献記録時代						
3語幹	奈良時代	ak;ë-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö ak;e-yo
	平安時代	ak;e-Ø				
	鎌倉時代		ak;ur-u			
2語幹	室町時代					
	江戸・前期					
1語幹	江戸・後期				ak;e-ro	
	現代	ak;e-Ø	ak;e-ru	ak;e-ru		(なし)

奈良時代には、ak;e-, ak;Ø-, ak;ur- という3形末動詞になっていた。  
 鎌倉時代には、ak;e-, (ak;Ø- → ak;ur- の2形末動詞)になった。  
 江戸時代後期に今日の ak;e- (← ak;ur-) の1形末動詞になった。

現象面だけで見ると、いわゆる下二段活用が下一段活用に変わったことになる。国語学は、これを「活用形式を整理したもの」とした。つまり、活用表の中の「く」という要素を、単純に「け」に「統合した」ものとした。(下の国語文法の活用表にある「未然形」の存在は、理論的には認められないので、前ページの表には欄がない。)

表E I-16 国語文法の活用表 (いわゆる下二段活用が下一段活用に変わる)

		動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良	下二段活用	あく	あ	け(乙)	け(乙)	く	くる	くれ	け(乙) <small>「よ」を付けた破し</small>
現代	下一段活用	あける	あ	け	け	ける	ける	けれ	ける, けよ

確かに、現象面だけで見れば、活用形式の整理である(下表、二重線の左側)。

表E I-17 「活用の整理」と、その実質 (コラムV2 の表より)

	活用の整理 (国語文法)		その実質は動詞の態拡張		
	元の活用	現代語の活用	語例(現代語)	方式	参照
①	下二段活用	→ 下一段活用	開ける ak;e-	方式[ 2 ]	
②	上二段活用	→ 上一段活用	起きる ok;i-	方式[ 3 ]	
③	上一段活用	→ 上一段活用	見る mi-	方式[ 1 ]	
④	四段活用	↘	読む yom-	方式[ 1 ]	
⑤	ラ変活用	↘	ある ar-	方式[ 1 ] Vp.87	
⑥	ナ変活用	↘	死ぬ sin-	方式[ 3 ] Vp.86	
⑦	下一段活用	↘	蹴る ke;r-	方式[ 1 ]	
⑧	カ変活用	→ カ変活用	来る k;ur-	方式[ 3 ] Vp.85	
⑨	サ変活用	→ サ変活用	する s;ur-	方式[ 3 ] Vp.84	

表から読みとれることは以下のとおり。

- ・いわゆる「上二段活用」「下二段活用」がなくなったこと
- ・いわゆる「四段活用」「ラ変活用」「ナ変活用」および「(蹴る)の下一段活用」が「五段活用」に一本化されたこと

つまり、「活用形式が整理されて少なくなった」。……国語文法の捉え方は、日本語話者が歴史を通じて活用を整理して、日本語を合理化したということなのである。確かに、現象面だけを見れば、そう言うことはできる。これは「係り結び」考察にも関係する。

しかし、その現象はなぜ生じたのか、その実質は何であったのか、を考えねばならないのではないかと。…実質は動詞の態拡張なのである(上表、二重線の右側)。これについては『日本語のしくみ (4)』のV3章で詳しく述べた。また、『日本語態構造の研究 - 日本語構造伝達文法・B-』で、より詳しく研究している。

## 5.2 「活用の整理」は目的ではなく、「動詞の態拡張」の結果である

ある研究では、活用形を少なくすることが目的で、それにより「活用の整理」がもたらされたとする。それは違う。「活用の整理」は「動詞の態拡張」がもたらした結果なのである。

## コラムE2

今泉喜一

## 断捨離すべき不要な概念、用語

国語文法には、日本語構造伝達文法の視点から見ると、不要な概念、用語がある。この論文に関係するものの一部だけを取り上げる。

■ たとえば、「未然形」である。これは定義のしようがない。未然形は「書かせる」の「書か kak-a」の部分であるが、-a が何か意味を持っているだろうか。

「花咲かじじい」の「咲か sak-a」に -a があるが、これは「咲かせ sak-as-e」の略であるので、-a は原因態詞 -as- の一部なのである。……ちなみに、「書かない」は kak-ana.k-i であり、「書かれる」は kak-ar-e-ru、「書こう」は kak-oo である。

どこからも -a という形態素は出てこない。したがって、「未然形」は定義できない。「未然形」は不要な用語なのである。

■ また、「上一段活用動詞」というが、これは「落ちる oti-ru」のように動詞末が i で終わることを意味しているにすぎない。「i 末動詞」のほうが適切である。

同様に「下一段活用動詞」も不要。「やせる yase-ru」のように動詞末が e で終わることを意味しているだけだからである。「e 末動詞」のほうが適切である。

「五段活用動詞」は、「取る tor-u」のように動詞末が子音で終わっていることを示すだけである。「子音末動詞」のほうが適切である。

「上一段活用」「下一段活用」「五段活用」は、動詞が正しく捉えられない「かな」を使う国語文法だからこそ必要になった用語である。

■ 古語の「四段活用動詞」は子音末動詞である。「上二段活用動詞」、「下二段活用動詞」は、奈良時代から鎌倉時代までは「3形末動詞」、鎌倉時代から江戸時代前期までは「2形末動詞」であり、江戸時代後期以降は「1形末動詞」となった。

表Eコ-1 動詞末 (3形, 2形, 1形)

	咲く sak-u		起く ok;Ø-u		寄す yos;Ø-u				
奈良～鎌倉	四 段 活 用 動 詞	子 音 末 動 詞	s a k-	上 一 段 活 用 動 詞	3 形 末	ok;i- ok;Ø- ok;ur-	下 一 段 活 用 動 詞	3 形 末	yos;e- yos;Ø- yos;ur-
鎌倉～江戸前期					2 形 末	ok;i- ok;ur-		2 形 末	yos;e- yos;ur-
江戸後期以降					1 形 末	ok;i-		1 形 末	yos;e-
	子音末動詞		i 末動詞		e 末動詞				

■ 「格」は「実体と属性の論理関係」と定義したので、「連体格」は矛盾していて、不要。「格」とは「連用格」のことなのだから、「連用格」もいらなくなる。

国語文法には必要であっても、構造伝達文法の観点からは、断捨離して整理すべき不要な概念・用語が多い。